



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウクライナ国ドロゴビチ市の聖ユリイ教会堂（1657）：構成上の特質と壁画を中心にして〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	KHATAYEVA, TETYANA
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第11862号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58891
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Tetyana_Khatayeva_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士(国際広報メディア) 氏名：ハタエワ タチアナ

学位論文題名

ウクライナ国ドロゴビチ市の聖ユリイ教会堂(1657)

ー構成上の特質と壁画を中心にしてー

本論は、ウクライナ西部のリヴィウ州ドロゴビチ市にある聖ユリイ教会堂(1657)を対象とし、教会堂構成上の特質、および建築と壁画の関係を明らかにするために、歴史・建築史・美術史の観点から様々な検討を行った。

聖ユリイ教会堂はウクライナ全国に現存する木造教会堂の中で構成上の特質、壁画の数の多さと保存状態の良好さにより、特に注目すべき建造物である。

聖ユリイ教会堂はウクライナの木造教会堂に共通する構成を示すものの、平面プランはドロゴビチ市が属するリヴィウ州だけではなく、ウクライナ全国において異例なものである。聖ユリイ教会堂の婦人室は六角形を示し、入口の扉は西正面ではなく、北西に逸れた狭い壁に設置されている。このような扉の配置は、同地方の教会堂に比べて、他に類を見ないものである。

また、婦人室と礼拝室は隙間なく壁画に埋め尽くされている。ウクライナの木造教会堂の内部装飾としてアイコンを使うのが一般的であるが、アイコンだけではなく、木面に直接描かれた壁画が見られる。図像の数と保存状態の点からも、聖ユリイ教会堂の壁画はウクライナにおいて最も重要であると言える。

ウクライナの木造教会堂建築に関する研究は、充分であるとは言えないが、教会堂建築の概要およびプランの分類や地域毎の特質は論じられてきた。しかし、単体建築に関する学術論文は、ミリャエワ(1969)の『ポテーリチの壁画』の他には皆無である。聖ユリイ教会堂に関する研究は、ログヴィン(1982)のような概説書の一部で簡単に触れているのみであり、実証を伴わない仮説に留まっている。平面構成に関する先行研究にはドラガン(1937)とユルチェンコ(1969)がある。聖ユリイ教会堂の平面構成の成り立ちについて二者の見解は一致しておらず、また証拠も示されていない。両者は聖ユリイ教会堂の構成上の特質に関する仮説を立てている一方、時代検証を行うことなく、聖ユリイ教会堂の成り立ちの背景にある歴史に一切触れていない。また、聖ユリイ教会堂の壁画に関する研究には、ジョルトフスキー(1988)がある。17世紀から18世紀のウクライナ美術という広範囲な研

究の中で聖ユリイ教会堂の壁画に触れているのみで、教会堂の建築と壁画との関係については言及していない。

聖ユリイ教会堂の構成上の特質を実証的に検証する必要があると同時に、構造と壁画の関係を明らかにするという課題が残されたままである。さらに、17 世紀後半から 18 世紀初頭に施された壁画の図像同定を行い、壁画の配置プログラム(図像プログラミング)を解明する必要がある。また、聖ユリイ教会堂における壁画の特徴を論じるうえで同地域に壁画を所有する木造教会堂の遺構との比較は欠かせない。

本論は、上述した先行研究を十分に踏まえた上で、歴史・建築史・美術史という多角的な視点から聖ユリイ教会堂の特質を論じる横断的な研究である。先行研究において上記の分野を同時に視野に入れた研究はなく、それぞれの分野の領域を超えて木造建築の実体を把握する包括的な研究は見られない。本論は、聖ユリイ教会堂を三つの分野の観点から分析する最初の試みになるので、歴史・建築史・美術史の専門家をはじめ、地域文化や民俗建築分野において貴重な事例になると思われる。さらに、上述したアカデミックな還元に加え、本研究をウクライナ国内に発表することによって、木造教会堂建築に対する関心の向上や観光資源などとしての活用に繋がる成果が期待できる。

本論は序章および、以下の三つの章と結論により構成される。

【第一章 歴史的な背景】では、キエフルーシ国家が成立した 9 世紀から、聖ユリイ教会堂が建てられた 17 世紀までの歴史を概観し、教会堂の二度の改築があった時期についてドロゴビチ市の歴史というプリズムを通して考察した。

【第二章 建築】では、まずウクライナの木造教会堂の構成について述べ、聖ユリイ教会堂の構成上の特質について明らかにした。

【第三章 壁画】では、婦人室、礼拝室の壁画について現地調査で撮影した画像データを基に、キリスト教図像事典やすでに同定されている壁画図像などと照合し、同定を行い、聖ユリイ教会堂の壁画図像が持っている特徴を論じた。西部ウクライナの三つの遺構の壁画との比較を行った。さらに図像配置プログラムを考察した。

【結論】では本論により明らかになった点をまとめ、総合的に考察を行った。

以上のように、本論では、聖ユリイ教会堂の変遷を明らかにし、教会堂建築がもつ構成上の特質を実証に基づき解明し、壁画図像の同定及びプログラミングについて論じる。加えて、図像配置プログラムの考察や図像配置図の作成を行うことで、聖ユリイ教会堂の建築や内部空間構成に係わる問題を広範に包括することになる。

聖ユリイ教会堂は 17 世紀に建設されたウクライナの木造教会堂の中で特に重要な遺構であるため、本論で取り上げることで、17 世紀のウクライナ木造教会堂建築史及びウクライナ美術史において新たな見解を示すと共に、世界の木造建築史の研究に貢献できると思われる。聖ユリイ教会堂の壁画は、「地域の聖書」と呼ばれているほど、17～18 世紀における西部ウクライナの生活の記憶を保有している。しかし、時代と共にその記憶は消えつつある。聖ユリイ教会堂の壁画まだ記録可能な保存状態にある今こそ、その壁画の記録をできる限り正確かつ厳密に行う必要がある。本論は、聖ユリイ教会堂の認知度を上げることで、教会堂の保存に貢献できると考えられる。